

24 三途の川

星野博美

死んでしまった人にアンケートを取りたい。

生き返った人では、だめだ。

あなたはその時、何を見たのか？

長姉は二十代の頃、死にかけてたことがあるそうだ。

それがどの程度「死」に近い状況だったのか、客観的には証明できな

い。しかし彼女がそれを「死」と認識したなら、きっとその存在は案外近くにあったのだろう。先日、そんな話で家族と盛り上がった。

それは私がすでに家を離れ、姉がまだ実家にいた頃の話である。当時姉はシステム・エンジニアとして働いていた。仕事は多忙を極め、その代わりに給料はすこぶるよく、仕事のストレスを退社後に酒でまぎらわすという、荒れた生活をしていた。もともと、同居していなかった私は当時の様子を詳しくは知らない。姉の健康を心配する母から、たびたびそう聞かされた。

その晩姉は、仲のよい同僚たちといつものように酒を飲みに行き、浴びるほど飲んだ。そして大木が雷に打たれて倒れるように、何の前ぶれもなく、突然その場に倒れてしまった。

「気がついたら草むらみたいな所にいた。かき分けて進んで行ったら、目の前に川が現れたのよ」

三途の川か！ 「川幅何メートル？」と尋ねると「覚えてない」。

「川に近づいたら、川岸の向こうが花畑になっていてさ」

天国か！ 「何の花？ 何色？」と質問すると、「あんたがいちいちつつこむと、話がちつとも前に進まない」と周囲からたしなめられる。

「花畑の中におじいちゃんが立っていたの」

出たよ、おじいちゃん……完全にあの世である。

姉は続けた。祖父が「こつちへ来い」と手招きをしているように見えたので、川の中へ入っていった。半分ほど進んだところで、祖父の手の振り方が逆であることに気がついた。「来い」ではなく、手を下から上

に上げる「来るな」に見えたというのだ。大好きなおじいちゃんの方へ行きたいのに、なぜそちら側へ行つてはいけないのか？ 姉は逡巡して、後ろを振り返った。すると自分の名前を叫ぶ声が遠くから聞こえた。後ずさりすると、その声が大きくなっていき、まるでその声に吸い込まれるかのように、もと来た方向へ高速で引き戻された。目を開けると、同僚たちが泣きながら自分の顔をのぞきこんでいた。姉が此岸へ帰ってきた瞬間だった。

「万一の時、名前を呼ぶのつて大事よ。友達が呼んでくれなかったら、川を渡っていたかもしれない」

俗にいう急性アルコール中毒の類であろう。無事に戻ってきたからいまでは笑い話だが、長女が死ぬかもしれない話話を三十年近く後に聞

かされた母の顔はひきつり、「あまりに馬鹿で話にならない」と深いため息をついた。

母の怒りは横におき、姉が見た(と思う)ものに私は惹かれた。

姉の生命に一瞬危機が訪れた時、三途の川、花畑、祖父という三点セツトが出現した。当時の姉にとって、鬼籍に入った近親者は祖父のみだったから、そこに登場する人物は祖父以外ありえない。この三要素が揃ったことで、姉は「死」をおぼろげながらに感知した。

三途の川の登場で、姉の死生観が仏教的であると判断することは、留保したい。私は彼女が心の内でどんな宗教観を持っているのか、あるいは持っていないのか、知らないのだから。川は、確かに仏教的である。しかし川の向こう岸が花畑だったという点は、キリスト教の天国のイメ

ージを彷彿させる。姉がキリスト教徒、特にカトリックであるなら、花畑に立つ人物はキリストや自分が心を寄せる聖人になりそうだが——その場合は三途の川は登場しないだろう——、そこに立っていたのは祖父だ。祖先崇拜の気配が感じられる。

つまりこの三点セットが、姉の死生観の象徴なのだろう。

あまりにベタだろう、と私は内心想った。

しかし死にかけて人の死生観に「ベタだ」という感想を持つなどはだ失礼な話だ。ことは緊急を要したのである。何が自分に起きているのかがわからない人間に、生存本能は最も確な緊急メッセージを送り、「おまえ、死にかけてるぞ」と伝えてやらなければならないのだ。そこで曖昧なメッセージを送って判断を惑わせたりしたら、取り返しの

つかないことになる。

「あまりにベタなことは重々承知しているが、この三つを出せば、その意味するところは『死』だと、わかってくれるだろう」

脳が悩んだ末、とっさにこの三要素を選んだのだと、私には思えてならなかった。そしてその意図は、正しく伝わったのだ。

場は、へんな高揚感に包まれた。

私は、祖父母や叔母夫婦、すでにこの世を去った猫たちの夢はしょっちゅう見るが、川と花畑は見たことがない。

「気を失ったことは何度もあるけど、三途の川は出て来なかった」
次姉がそう言うのと、「それほど危険じゃなかったんだよ」と長姉。ど

ことなく得意げである。それがどれほど愚かな体験であろうと、他の人が見たことのないものを見ただけで、人は優位に立つ。

「とにかく、川と花畑とおじいちゃんが出てきたら要注意だよ」と、指南し始める始末。

「雪山は見たことあるけどね」

私が思わずそう言うと、場が静まった。

「雪山って、何？」

私は風呂で寝てしまう悪い習慣を持っている。要注意なのは、仕事で疲れ果て、「今日はゆっくり風呂に入ろう！」と思う午前四時頃の間帯だ。ぬるい風呂に入る。一瞬で眠りに落ちる。寒さで目を覚ます。熱

いお湯を足す。また寝る。湯船に沈みこんでお湯をしこたま飲み、飛び起きる。出なければ、と思うのに立ち上がる気力がなく、また熱いお湯を足して寝る。それを繰り返すうちに風呂はすっかり水になり、身体は冷えきっている。これまでの最長記録は六時間だった。

そんな時、雪山が登場した。

夢の中で私は、雪にうもれて眠りかけていた。するとどこからともなく、「寝るな、寝てはならん！」という声が聞こえた。「『八甲田山』だ！」と思った。そして「そうだ、雪山で寝ると死ぬんだった」と思い出し、ぱっと目が覚めたのだ。

『八甲田山』は私が小学生の時に公開され、大ヒットした映画だ。七十年代後半の日本映画には元気があって、ヒットした作品のセリフがク

ラスですぐに取り入れられたものだった。『八つ墓村』の「崇りじゃ！崇りなんじゃ！」とか、『人間の証明』の「母さん、あれは好きな帽子でしたよ」とか。私は帽子をなくす常習犯だったので、このセリフはよく使った。『砂の器』の「知らねえ！ そんな人知らねえ！」も、子どもたちに好まれたフレーズだった。

誰かが机につっぷして眠っていると、「寝るな、寝てはならん！」と行って大袈裟に起こす。すると起こされた生徒はこう言ったものだ。

「天は我々を見放した！」

「そりゃあ、完全に死にかけてたよ」と長姉。

「そうなの？」

「もう、風呂は禁止だね」

私の死生観は、映画『八甲田山』なのか。ベタを通り越して、ただの馬鹿ではないか。

「どいつもこいつも、馬鹿ばかりだ！」
母だけが、いつまでも憤慨していた。